

# A Commentary on Domyo Ajyari Syu (10)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏木, 由夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6853">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6853</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『道命阿闍梨集』注釈(十)

柏木由夫

【キーワード】 時鳥、花山院、嵐山、法輪寺

291 いでたつ日、あるところより  
はかなさのさだめなきよのわかれちにとまらぬものはなみだなり  
けり

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 旅に出発する日、ある所から送られてきたあつけない命があてにならないこの世での別れ道で、あなたが旅立つことに付いて、とどまっていけないものは私の涙だったよ。

【語釈】

○はかなさ―八八の語釈参照。

○さだめなきよ―八八の語釈参照。

○とまらぬものはなみだなりけり―悲しみなどの感慨を新たにすることを表す場合に用いられる。「わかれち」と「とまらぬ」は縁語。

別れ路の涙に袖もさそはれていかなる道にとまらざるらむ

(実方集・二二六)

『道命阿闍梨集』注釈(十)

あたらしき年のはじめと思へどもとまらぬものは涙なりけり

(実頼集・九九)

世をそむきわけゆく野辺の露けさにとまらぬものは涙なりけり

(行尊集・一三)

【評】 八八に重出。四句「さきだつものは」。八八と同じく、私も道命について行きたいが果たせないで涙のみが思いを示す、との余韻がある。八八の評参照。

かへし

292 かへりこむこともまれなるわかれちをなになみだもとどめてよ  
きみ

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

帰って来ることなかなか出来ない旅の別れ道を、何とか涙もともにとどめて下さい。あなたよ。

【語釈】

○かへりこむこともまれなるわかれぢ―八九の語釈参照。

○なにかなみだも―八九の語釈参照。

○とゞめてよきみ―八九の語釈参照。

【評】 八九に重出。詞書「御返」。道命からの、旅に出ないで済むようにし、涙もとどめてほしいという返事。次の二九三も同時詠か。八九の評参照。

いでたつ日

293 もろともにゆく人もなきわかれぢはなみだばかりぞとまらざりける

【校異】 ○なき―かな(谷)

【他文獻】 千載集・離別・四八七 詞書「修行に出でて熊野に詣でける時、人につかはしける」

【現代語訳】 出発する日

伴って一緒に行く人もない旅の別れ道では、涙だけが止まらず伴うことだよ。

【語釈】

○なみだばかりぞとまらざりける―知人達はすべて旅に「ゆく」道命に相反して「とまる」のに、孤独な旅立ちに伴うのは涙のみだ、との寂しさを訴えた。「もろともにゆく人もなき」悲しみ。

これやこのゆくもとまるも別れては知るも知らぬも逢坂の関

(素性集・四七)

別れ路は心も行かず唐衣着れば涙ぞ先にたちける

(後撰集・離別羈旅・一三二九・読み人知らず)

とどまらぬ涙ばかりぞあはれなる思ひ絶えなん人は人にて

(赤染衛門集・三三八)

惜しみつつ別る人を見る時は我が涙さへとまらざりけり

(貫之集・四二九)

【評】 前歌と同じく別れの涙を詠むが、前歌までは別れて残った人の涙で、ここは旅立つ道命の涙も含むとすべきだろう。心情をほとんど無技巧で素直に吐露した。

歌いとうよよみて、おこせたるかへりごとに

294 これはみつえこそしらせねわが恋はかきつくすべきかたもなければ

【校異】 なし。

【他文獻】 なし。

【現代語訳】 歌をとでも多く詠んで、送ってきた返事にお送りいただいたこれらたくさんのお歌を見ました。しかし、私の気持ちをあなたに知らせることはできません。私の恋は書き尽くせる方法もないので。

【語釈】

○これはみつ―九四の語釈参照。

○えこそしらせね―九四の語釈参照。

○かきつくす―九四の語釈参照。

恋ひ恋ひて会へる時だにうるはしき(愛寸(ウツクシキ)西本願寺本訓)言つくしてよ長くと思はば(万葉集・巻四・六六四、六一、古今六帖・第五・二五八四 二三句「あくるときだにうつくしき」)

○かたもなければ―九四の語釈参照。

【評】 九四に重出。詞書「人の、歌おほうよみてをこせたりし、返」。

二句「えこそしらね」、五句「かたしなれば」。九四の評参照。

あるところに、月を

295 ふゆのよの氷のひまのあらませばふりさけ月をながめまじやは

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 ある所で、月を詠んだ

冬の夜の寒さで凍る氷に隙間がもしあったならば、空を振り仰いで月を眺めるだろうか、いや眺めないだろう。氷が凜々と敷き詰めているように見えるからこそ、空から冷たく光を放つ月を見ることだよ。

【語釈】

○ふゆのよの月―次に掲げた『和漢朗詠集』の詩句から、張り詰めた氷に例える冬の月の和歌が詠まれるようになった。

冬の夜の池の氷のさやけきは月の光の磨くなりけり

(拾遺集・冬・二四〇・元輔)

天の原空さへ冴へや渡るらむ氷と見ゆる冬の夜の月

(同・同・二四二・惠慶)

秦甸之一千余里 凜凜氷鋪 漢家之三十六宮 澄澄粉飾

(和漢朗詠集・十五夜・二四〇)

○氷のひま―氷の隙間。ここでは、凍てつくような寒さの中で、鏡のように氷が隙間なく一面に張り詰めている状態にあることを想像しつつ、その隙間がある状態を仮想して述べた。

久方の空かき曇り時雨つつ氷のひまも見えぬ今朝かな

(好忠集・三二八〈毎月集 十一月中〉)

○ふりさけ―振り仰いで。

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

(古今集・羈旅・四〇六・安倍仲麿)

【評】『和漢朗詠集』の句や『拾遺集』歌を本とし、冬の月のよ  
うな冷たく鋭い美を詠んだ。

世のはかなうきこゆるころ

296 あだなりとなげかれながら山ざくらよのはかなさをいかにきくら

ん

【校異】 ○はかなう―はかなる (谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 世間の人の命が、短く心細いと言われているころ

当てにならずはかない物と嘆かれていても、山桜は今の世の中のはかなさをどのように聞いているのだろうか。

【語釈】

○世のはかなうきこゆるころ―「世」は一〇四の「よの中」に同じく、人の命について見る世の中と解す。一〇四の語釈参照。

○あだなりと山ざくら―一〇四の語釈参照。桜の散りやすさも、それが嘆かれるのも一般的。

【評】 一〇四に重出。詞書「よの中の、いとはかなふきこゆるころ」。二句「なげかれなくに」。一〇四の評参照。

297 山たかみみねのもみちの色をみてそらをあふがぬ人はあらしな

【校異】 ○あらしな―しらしな (谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】

山が高いので、峰の紅葉の鮮やかな色を見て空を仰ぎ見ない人はないだろうよ。

【語釈】

○みねのみち―『古今集』以来多く用いられている歌語。

筑波嶺の峰の紅葉葉おちつもり知るも知らぬもなべて悲しも

(古今集・東歌・一〇九六)

小倉山峰の紅葉葉ころあらば今一度の行幸待たなん

(拾遺集・雑秋・一一一八・忠平)

○そらをあふがぬ―和歌の中で「空を仰ぐ」との表現は僅少。

成尋法師もろこしに渡り侍りてのち、かの母のもとへいひつ

かはしける

いかばかり空を仰ぎて嘆くらんいく雲井とも知らぬ別れを

(後拾遺集・別・四九九・読み人知らず)

【評】「山」と「峰」を一首内で間に配す点とともに、山の紅葉の鮮やかさのために空を仰ぐという一首全体の趣向まで、おおらかでこだわりのない自由な詠みぶり。内容から前歌と一連とは考えられず、詞書は脱落したか。

ある人、けさうする女の、松ふくかぜのと、ひとしていはせ  
たるをとてこふに、ふたつが中にこゝろにつかむをとて

298 しられじとおもひはなればおとにだにきけども人のいはずぞあら  
まし

【校異】 ○ある人―ある人の(谷)、○おもひ―おもふ(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 ある人が、恋する女が「松吹く風の」と人づてに言わせ  
てきたのだがと言って、返事を欲しがるので、二首の中で  
気に入ったのを返事にしようとして

私との仲を知られたくないと、あなたが決断するのならば、私につい  
て噂だけ聞いても、あなたは何も言わないでしょうに。私との仲を人

に知られたいのですね。

【語釈】

○松ふくかぜの―「ある人」の恋人が、人に使いをさせて「ある人」

に言わた、このことだが、その内容は次の『千類集』の歌などが

らすると、三句の「音にだに聞け」を導くものだろう。

まだ峰に松吹く風の音羽山音にのみやは聞き渡るべき

(千類集・一〇〇)

山里の初秋といふ心を

いづこにも秋は来ぬれど山里の松吹く風はことにぞありける

(公任集・八一)

○こふ―「ある人」が道命に恋人への返事の代作を頼んで来た。

○ふたつが中にこゝろにつかむをとて―次の二首(二九八・二九九)

のうち「ある人」が気に入った方を返事にせよ、というつもりで詠

んだもの、とのこと。

○しられじと―以下、「ある人」の気持ちでの代作。あなた(ある人

の恋人)が自分のことを知られまいと、の意か。

○おもひはなれば―「思ひ放つ」は「物事に対する思いをきっぱり捨

てる。思い切って手放す。構わないで捨てておく」(日本国語大辞

典)。あなたが私(ある人)を袖にするなら、とのことか。

ささがにのいとすぢならばあらぬ身の雲の他所には思ひ放ちそ

(重之集・一八六)

○おとにだにきけども人のいはずぞあらまし―あなた(恋人)が私(あ

る人)のことを噂にすら聞いても、あなたは何も言っていないでしょ

うに。人を介してでも言ってきたからには、あなたは知られたくな

いとは思ってないのでしょうか。もっと深く付き合いたいのでしょう。

【評】「松吹く風の」がよくわからない。ある人に、自分との仲につ

いての噂を聞いてますと、女が人づてで言ってきたと解した。和歌は、

女もある人への関心があるはずと、女の恋心を言い現した。

299 よしさらばまつふくかぜのおとをだにひとつづてならできくよしも  
がな

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】

そうですか。それなら、その松を吹く風が立てる音のように、あなた  
の声だけでも人づてでなく聞きたいものです。

【語釈】

○よしさらば―ここでは、女の「松吹く風」の言葉を受け入れて、以  
下を述べる。

頼めたる夜見えざりける男の後にまうで来たりけるに、出で

会はざりければ言ひ侘びて、つらきことを知らせつるなど言

はせたりければ詠める

よしさらば辛さは我に習ひけり頼めて来ぬは誰か教へし

(詞花集・雑上・三一六・清少納言)

○おとをだにひとつづてならできくよしもがな―女の声を直接聞きたい、  
の意を表す。

今はただ思ひ絶えなんとばかりを人づてならで言ふよしもがな

(後拾遺集・恋三・七五〇・道雅)

よそながらあはれと言はむことよりも人づてならで厭へとぞ思ふ

(詞花集・恋上・一九六・成通)

【評】 女の方から、ある人のことを聞いたと言つて来たのを受け入れ  
て、逆にこちら(ある人)こそあなた(女)の声を直に聞きたいと返  
したと解した。

年内に節分するとし、かたがへにまかりて、ありあけの月  
をみて

300 あらたまのとしはすぐれどありあけの月のかはらぬことぞあやし  
き

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 年内に節分をする年、方違えに出掛けて、有明の月を見

て

新年には過ぎるけれど、方違えをしても有明の月が変わらないことが、  
とても不思議だよ。

【語釈】

○年内に節分するとし―一一四の語釈参照。

○かたがへ―一一四の語釈参照。

○あらたまのとしはすぐれど―節分の後、旧年は終えて新年になるは

ずだがの意。一一四の語釈参照。

○月のかはらぬ―一一四の語釈に示したが、①詞書に従い、方違えで

場所は移動したが月は変わらない、②新しい年になるが、空の月は

旧年と変わらない、の二通り考えられる。

【評】 一一四に重出。詞書「歳内に、節分あるとし、かた、かへに、

ものへまかりて、月をみて」。二句「としはしらくねと」、四・五句「月

はかはらぬものにそ有ける」。四句は、①②の両意があり得るが、上

句との対応から見れば②の意で理解すべきか。

301 長恨歌のうた、人のよみはべるに  
ありとだにいかできくけんまどの中に人にしられでとしへたる身  
は

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 長恨歌の和歌を人が詠みましたので、  
いることをすらすら、どのようにして聞いたのだろうか。深窓の内の人に  
知られないで年を過ごしている楊貴妃のことは。

【語釈】

○長恨歌のうた―一四九参照。『長恨歌』を本とする和歌については、  
山崎誠「平安朝の和歌・物語と長恨歌―伊勢集・高遠集・道濟集・  
道命阿闍梨集及び宇津保・源氏物語をめぐって―」（『中世文芸』  
四九 昭和四六年三月）を参照。この一首は詩中の句「養在深閨人  
未識」に拠る。

○ありとだにいかでき、けむ―楊貴妃について知ることができたこと  
の不審を言う。

ありとだに聞くべきものを会坂の関のあなたぞ届けかりける

（後撰集・恋五・九八一・読み人知らず）

○まどの中に人にしられでとしへたる身は―親族や周囲に大切に守ら  
れて生活し成長したことを表す。「身」が楊貴妃を指す。

親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先こもれる窓の内なるほどは、  
ただ片かどを聞き伝へて心を動かすこともあり。

（源氏物語 帚木）

我が恋は深きみ山の松なれや人に知られて年の経つれば

（顕季集・五二）

【評】 谷山本歌欠。『長恨歌』の内容を和歌で表すという歌会が歌人  
たちによって催され、それに道命が参加した折の詠か。

302 おもひきやみやこのくものうへならでこゝろそらなる月をみむと  
は

【校異】 ○みむとは―み□とは（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】  
思ったことか、都の宮中ではない所で、虚ろな思いで月を見ることに  
なるとは。

【語釈】

○おもひきや―歌末を「とは」で結ぶ定形。

思ひきや鄙の別れに衰えてあまの縄たさいさりせむとは

（古今集・雑下・九六一・篁）

思ひきや別れし秋にめぐりあひてまたもこの世の月を見むとは

（新古今集・雑下・一五三二・俊成）

○みやこのくものうへならで―「雲の上」は月のある空と同時に宮中  
を指す。「殿上をば、くものうへといふ」（能因歌枕）。「都の雲の上  
ならで」で旅中を表し、『長恨歌』当該詩句中の「行宮」を言う。

ここにだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやらるれ

（拾遺集・秋・一七五・経臣）

常よりもさやけき秋の月を見てあはれ恋しき雲の上かな

（後拾遺集・雑一・八五四・師光）

○こゝろそらなる―心が虚ろになっている状態。長恨歌中の「傷心」  
を表す。「空」は「雲」「月」と縁語。

春霞立つ暁を見るからに心ぞ空になりぬべらなる

（拾遺集・別・三〇一・読み人知らず）

月に向ひて秋を惜しむといふ題、九月十三日の夜

常よりも心空なる月見ずはかくまで秋を惜しままじやは

（為仲集・一五）

【評】 谷山本は三〇一の詞書に続く。『長恨歌』の「行宮見月傷心色」  
に拠り、玄宗皇帝の心を詠む。三〇一と同じ歌会での詠か。

303 みにだにもみじとおもひし所しもなみだむせびてゆきもやられず

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】

一切目を向けることもするまいと思つた所に限つて、涙にむせんで先へと進むこともできない。

【語釈】

○みにだにもみじとおもひし所しも—底本・書陵部二本は「み」を「身」で示すが、「見」の仮名と解す。「所」は楊貴妃が死んだ馬嵬の地。『長恨歌』の「馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處」に拠る。

津の国より人の言ひおこせたる

忘れ草摘む人ありと聞きしかば見にだにも見ず住吉の岸

(和泉式部集・二四二)

○なみだむせびて—「むせぶ」は八代集中では『新古今集』に初出。

「咽ムセブ」(類聚名義抄)、「嗚咽なり。とどこほりゆかぬなり」

(和歌初学抄)。「①煙や異物で喉が息苦しくなる。飲食物などで息が詰まったり咳きこんだりする。むせる。②こみあげる感情で声がつまる。声をつまらせながら激しく泣く。むせび泣く。③むせび泣くような声や音を立てる。④遣水の流れなどがつかえる・流れが滞りつつ水音をたてる。」(日本国語大辞典)

咽霧山鶯啼尚少(和漢朗詠集・鶯・元稹)

巖泉咽嶺猿吟(同・行旅・為雅)

防人が情と為り思ひを陳べて作る歌一首併せて短歌

大君の 命畏み 妻別れ 悲しくはあれど(中略)ま幸くて 早  
帰りに来と 真袖もち 涙を拭ひ むせびつつ 言どひすれば…

(万葉集・卷二〇・四四二二)

石間より出づる泉ぞむせぶなる昔を恋ふる恋にやあるらん

(兼盛集・一七、惠慶集・一八一第四句「昔をしのぶ」)

『道命阿闍梨集』注釈(十)

人知れぬ涙にむせぶ夕暮れは引きかづきてぞ打ち伏されける

(山家集・一三三二)

○ゆきもやられず—悲しみの辛さのために、歩みを進めることができない。『長恨歌』中の「到此躊躇不能去」に拠る。

秋花見にまかりて

行くときと見れども飽かぬ秋の野はゆきもやられずとまるともなし

(伊勢集・二四二)

【評】 前歌に同じく『長恨歌』を詠む歌会での詠。楊貴妃の死地にあつて、上句で目を背けて一刻も早く去りたいとの意思を示し、下句で歩を進められない玄宗皇帝の悲しみを詠む。上下の対比的な構成が悲しみの深さを効果的に表す。

歌よみしに、山ざとにてかはらけとりて

304 いけみづのなからましかば山ざとにひとりや人のすむべかりける

【校異】 ○山ざと—やまと(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 歌を詠んだ時に、山里で杯を取って清らかな池の水がなかったならば、この山里に誰でも一人で人が住んで心澄ますことができるだろうか。いやないだろう。

【語釈】

○いけみづ—一三三三の語釈参照。

○山ざと—一三三三の語釈参照。

○ひとりや人のすむべかりける—一三三三の語釈参照。

【評】 一三三三に重出。詞書「ひろさはといふ所にまかりたり、人々ありて、いけみづのきよくもあるかなといひて、歌よみしに、かはらけとりて」。広沢の池は観月の勝地だった。一三三三の語釈・評参照。

人のもとにやる

305 秋風のうらふくごとにをぎのはのうごきあゆまにきみぞこひしき

【校異】 ○うらふく—うちふく(谷)、○あゆま—あゆき(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 人の所に送る

あなたが私に飽きたと思わせる秋風が葉裏を吹くたびに、荻の葉が揺れて落ち散る時に、あなたが恋しくてならない。

【語釈】

○秋風のうらふく—一三四の語釈参照。「うらふく」は 葛の葉を風が吹いて裏返すことが通例。ここでは返歌の「うらみ」を導くか。

秋風のうらふきかへす葛の葉の裏見てもなほうらめしきかな

(平中物語・第十八段・七七)

旅衣うらふきかへり秋風にひとり寝覚めて恋しかりしを

(紀伊集・七七)

○をぎのは—一三四の語釈参照。

○うごきあゆま—一三四の「うごきあゆだに」の語釈参照。「あゆまに」は、落ちる間に、の意か。

○きみぞこひしき—一三四の語釈参照。

【評】 一三四に重出。二句「うちふくことに」、四句「うごきあゆだに」。一三四の評参照。

かへし

306 あきかぜはふきすぎでのみゆくおとををぎのしたばはうらみこそすれ

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

私に飽きたという秋風は、吹いて過ぎてだけゆく音であることを、荻の下葉が裏を見せるように、私は恨むばかりです。

【語釈】

○あきかぜはふきすぎでのみゆく—一三五の語釈参照。

○おと—一三五の語釈参照。

○をぎのしたば—一三五の語釈参照。

○うらみこそすれ—一三五の語釈参照。

【評】 一三五に重出。一三五の評参照。

又かへし

307 ふきかへす風なかりせばをぎのはのうらみつとだにいはすぞあましまし

【校異】 ○あましまし—有ける(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 再度、返事をして

吹き戻す風がなかったら荻の葉の裏を見ることもないように、私からの言いかげがなかったならば、あなたは恨んだとさえ言わないだろうに。

【語釈】

○ふきかへす風—一三六の語釈参照。

○をぎのは—一三六の語釈参照。

○うらみつとだにいはすぞあましまし—一三六の語釈参照。

【評】 一三六(冷泉家本欠)に重出。詞書「たちかへり」。谷山本第五句「いはすそ有ける」。一三六の評参照。

人々あつまりてさけなどのまするに、ものへゆくひとに

308 かくばかりあはれさやけき月をみていかなるよにかみるべかるらん

【校異】 ○―なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 人々が集まって酒などを飲ませる時に、あるところに行くと人々

これほどしみじみと美しくはつきりと見える月を見て、あなたは、後のどのような時に（同じような月を）見ることができらるうか。

【語釈】

○人々あつまるものへゆくひとに―三〇八と三〇九が一連だが、三〇九の

重出歌が三三九で、その詞書が「人々あつまりて、ものへゆくに、餞すとて」で、三〇八の詞書に相当するが若干意が通らない。一三九の語釈参照。別れに際して酒宴を催し和歌が詠まれた。他に、

『古今集』・三九七、『同』・九九三、『後拾遺集』・四七九など参照。

三月ばかり、越の国へまかりける人に酒たうびけるついでに恋しくは事づてもせむ帰るさのかりがねはまつ我が宿に鳴け

（後撰集・離別羈旅・一三一八・読み人知らず）

○さやけき月をみて―澄んで美しい月を見て。「みて」の主語は「ものへゆくひと」と解して現代語訳をした。

常よりもさやけき秋の月を見てあはれ恋しき雲の上かな

（後拾遺集・雜一・八五四・師光）

○いかなるよにかみるべかるらん―今夜ほどの美しい月が、以後に見られるのか、去って行く人の将来を危ぶむ気持ちと解した。誰が何を見るかはつきりせず、表現に難あり。

夢や夢現や夢とわかぬかないかなる夜にか覚めんとすらん

（新古今集・釈教・一九七二・赤染衛門）

夢ばかりまどろまでのみ過ぐすにはいかなる夜にか又は逢ふべき

（公任集・三三二）

【評】 親しい者達、あるいは同好の士が美しい月の下で酒宴を催し、今後同じ思いをすることがないだろうと、作者にとっても去って行く者にとっても同じ格別な楽しみだったことを前提にする。これによって別れを惜しんだ。

又

309 おもひいでしなきふるさとの思出にけふをや人のいはんとすらん

【校異】 ○又一欠（谷）、○おもひいてし―おもひても（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 又

思い出が格別ない故郷の思い出として、今日の賑わいを人は言おうとするのだろうか。

【語釈】

○おもひいでしなきふるさと―一三九の語釈参照。

○思出にけふをや人のいはん―一三九の語釈参照。

○いはんとすらん―一三九の語釈参照。

【評】 一三九に重出。詞書「人々あつまりて、ものへゆくに、餞すとて」。初句「思出も」。重出する和歌の関係については、一三九が本来だが詞書に難があり、後に三〇八・三〇九に整えられたとも、逆に三〇八・三〇九が先で、三〇八の和歌は単純な脱落、あるいは表現が未整理のために削除されて、一三九のみを残すはずだったとも推定できる。

ひさしうあはぬ人のもとに、年のはてに

310 としせてきみがこひしくおぼゆればあはぬ月日のつもるなるべし

【校異】 ○おほゆれば―おほゆるは(谷)、○つもる―つもり(書)  
【他文献】 なし。

【現代語訳】 しばらく会っていない人のところに、年末に送った  
年が押し詰まって、あなたが恋しく思えるので、会っていない間の月  
や日が積もり重なっているのだろう。

【語釈】

○年のはてに―一四〇の語釈参照。

○としせて―一四〇の語釈参照。

○あはぬ月日―一四〇の語釈参照。

○つもるなるべし―一四〇の語釈参照。

【評】 一四〇に重出。詞書「月をみて、ひさしくあはぬ人のもとに、  
年のはてに」。三句「おほゆるは」。三句の相違のせいで、一四〇とは、  
歌意に若干の差がある。一四〇は、君への恋しさがまさるのは歳月が  
積もったせいかと理由を求める内容である。三一〇は、恋しさがつ  
るので、歳月が積もったかと推測する内容である。一四〇の評参照。

長恨歌の、みかどの、もとの所にかへりたまで、むしどもの  
なき、くさかけにあらたるを御覧じて、なき給所に  
311 ふるさとはあさちがはらとあれはててよすがらむしのねをのみぞ  
なく

【校異】 ○くさかけ―くさかち(谷)、○よすから―夜から(谷)

【他文献】 後拾遺集・秋上・二七〇 詞書「長恨歌の絵に、玄宗もと  
の所に帰りて虫ども鳴き、草も枯れ渡りて、帝嘆き給へるか  
たある所を詠める」、後六六撰。

【現代語訳】 長恨歌の障子で、皇帝が、元の宮殿にお帰りになって、  
虫達が鳴いて、草陰に荒涼とした情景を御覧になって、お  
泣きになる所に

馴染んでいた宮殿は浅茅の原となって乱雑に茂り尽くし、夜中虫が鳴  
き続け、そのように我も声をあげて泣くばかりだ。

【語釈】

○長恨歌の―一四九の語釈「障子の絵」参照。

○みかどの―一四九の語釈「みかどのおまへに……なげき給へる所」  
参照。

○ふるさと―一四九の語釈参照。

○あさちがはら―一四九の語釈参照。

○よすがら―一四九の語釈参照。

○むしのねをのみぞなく―一四九の語釈参照。

【評】 一四九に重出。詞書「障子の絵に、みかとの、おまへにむしと  
もの草かけにあらたるをなげき給へる所」。一四九の評参照。

312 あらたまのとしこえしよりはるがすみたちるこそまてうぐひすの  
こゑ

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 新年が越えて来てから、春霞はかかり、立ったり座ったりして待つて  
いるよ、鶯の声を。

【語釈】

○あらたまのとしこえし―一五二の語釈参照。

○はるがすみたちるこそまて―一五二の語釈参照。

○うぐひすのこゑ―一五二の語釈参照。

【評】 一五二に重出。詞書「つれづれなるよのあるに、人々、たい  
十いたしてよむに、春二首」。詞書がないため、三一と同時詠のよ  
うに見えるが、一五二の詞書によって別の機会のものと知られる。一

五二の評参照。

313 風にちる花ちることにしらゆきのふりにしことぞおもひいでらるゝ

【校異】 ○ことに―ころに(谷)、○しらゆきの―しら雪(谷)、○おもひてらるゝ―おもひいてらるゝ(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】

風で散る花が散るたびに、白雪が降った情景が浮かび、過ぎ去ったことが思い出されるよ。

【語釈】

○花ちることに―和歌の用例に「ちることに」の句は検索されない。「ちる」は初句にも重なり、一五三の「みることに」が正しいか。

一五三の語釈参照。

○しらゆきのふりにしこと―一五三の語釈参照。

○おもひいでらるゝ―一五三の語釈参照。

【評】 一五三に重出。二句「花みることに」。一五三の評参照。

314 よの中は花のさかりなりにけりうれしとや思ふあはれとや思ふ

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】

世の中は花が満開の時になりました。それを嬉しいと思うか、すぐに散ることまで想像してしみじみと思うのか、どうだろう。

【語釈】

○花のさかりなりにけり―様々な花の満開が想定されるが、中心は

桜だろう。

春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりける

(古今集・春下・九七・読み人知らず)

藤波の花の盛りになりにけり奈良の都を思ひ出づや君

(家持集・四五)

我が宿や花の盛りになりぬらん道行く人のたちとまるかな

(重之集・二三五)

橘の花の盛りになりにけり山時鳥来鳴けしば鳴け(長能集・六九)

花のさかりを

待つ思ひ惜しむ嘆きのひまにただあはれほどなき花盛かな

(能因集・一九)

おしなべて花の盛りになりにけり山の端ごとにかかる白雲

(千載集・春上・六九・西行)

○うれしとや思ふあはれとや思ふ―満開を見る嬉しさと、すぐに散ると予想される悲しさが同時に重なって、どのような思いなのかと問いかけた。

世の中にうれしきものは思ふどち花見て過ぐす心なりけり

(拾遺集・雑春・一〇四七・兼盛)

散ることの憂きも忘れてあはれてふ事を桜に宿しつるかな

(後撰集・春下・一三三・仲宣)

【評】 花盛りの嬉しさと「あはれ」が対比されているとも読めるが、「あはれ」は能因歌や『後撰集』歌から、散ることからのつらさや嘆きという生な感情を越えたしみじみとした思いを示すと判断される。

むまやの、野火にやけたるを、かく人

315 はるのひにやけけむみづのむまやかな ふねはさもこそおきにかがれめ

【校異】 ○やけたるを―やけたる(谷)、○はるのひにやけ、む―春のひにいかてやけむ(谷)、○みづのむまやかな―みやまのとあるす(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 水駅が野火で焼けたのを、このように人が詠んだ春の日差しで焼けたという水駅だよ。荷を乗せる船は、なるほど燠になるように焦げ、沖に漕がれたことだろうよ。

【語釈】

○むまや―ここでは歌中に「みづのむまや」とあるので「水駅」か。

「水駅」とは、「古代の駅制で、陸路の陸駅に対して河岸に設けられ、駅船を備えて運輸の用に当てた所」(小学館『古語大辞典』)。

むまやちに曳舟渡しただ乗りに妹が心に乗りて来るかも

(古今六帖・第三・ふね・一八〇六、万葉集・卷十一・二七五九 初句「はゆまちに」四・五句「いもはこころにのりにけるかも」)

○野火―野を焼く火。主として春の初めに枯草を焼いて、新しい草の芽の伸びを良くする、その火。

○かく人―「かく」は、「このように」の意で、三二五の和歌を差し、「人」は三二五の作者と解した。三保氏は「絵を描いた人」とする【評】参照。

○はるのひ―「春の日」に「火」を懸ける。

焼かずとも草は萌え(燃え)なん春日野をただ春の日(火)に任せた  
らなん (新古今集・春上・七八・忠見)

○みづのむまや―「火」に対して「水」を趣向とする。

水鳥の下やすからぬ思ひにはあたりの水もこほらざりけり  
(拾遺集・冬・二二七・読み人知らず)

○ふねはさもこそおきにこがれめ―「船」は水駅に配されているもの。「沖」に「燠(おき)」、「漕がれめ」に「焦がれめ」を懸ける。水駅が焼けて船が沖に避難したと、船が焼けて燠となって焦げたを重ね

る。

かの江去る船待てしばし言問はん沖の白波まだ立たぬ間に

(拾遺集・物名・かのえさる・四二七・輔相)  
いかなれば舟木の山の紅葉ばの秋は過ぐれど焦(漕)がれざるらん  
(後拾遺集・秋下・三四六・通俊)

わたつ海の沖(燠)に漕(焦)がるもの見ればあまの釣りして帰る  
(蛙)なりけり (枕草子・村上の先帝の御時に、輔相集・二六)

【評】 実際の火災ではなく絵に描かれたものを見て、それを題とした詠と考える(三保サト子「道命の歌」―道綱母と花山院の存在を通して―『仁愛女子短期大学紀要』第17号、一九八六年三月)。水駅なのに火で燃えるという矛盾が絵の趣向で、それを和歌に反映させた。道命の詠ではない他人詠で、掛詞・縁語を駆使したきわめて技巧的な一首。谷山本は、全体を連歌として、前句「春の日にいかでやけむみやまの」に「とあるす(谷)」を介して、「ふねは」以下を道命による付句とする。

316 月みれば月はなかばになりにけり

とあれば  
おいぬる人のよわりゆくこと

【校異】 ○なかば―なから(谷)、○おいぬる―老また(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】  
月を見ると月の位置は、空の真ん中になりました。

とあるので、  
年取った人が弱ってゆくように

【語釈】  
○月はなかばになりにけり―月の満ち欠けではなく、月の位置が空の

頂点にあるが、この後は西へと沈む直前。

小夜更けて半ば長け行く久方の月吹き返せ秋の山風

(古今集・物名・四五二・景式王)

世の中を何にたとへむさ夜ふけてなかば入りぬる山の端の月

(能宣集・二四八)

○おいぬる人のよわりゆくごとく光を弱めて西に沈む月を、老人の衰えに譬えた。空の月を歳月に重ねる発想が前提にあつての比喩。

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの

(古今集・雑上・八七九・業平)

月みれば老いぬる身こそ悲しけれつひには山の端に隠れつつ

(清少納言集・二六、玉葉集・雑五・二五二)

五句「はにやかくれん」

【評】 詞書がなく、三一五の和歌に直結しているが関連はなく、脱落と思われる。短連歌で付け句が道命作か。月に無常や老いを見る発想は業平以下にすでに見られる。

月あかきをながむるほどに、いりぬれば

317 山のはにかくるとみつる月なれどわがこゝろにぞふかくいりぬる

【校異】 ○かくる―かくす(谷)、○なれと―なれば(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 月が明るいのを眺めているうちに沈んでしまったので山の端に隠れたと見た月だが、私の心に深く入ったことよ。

【語釈】

○山のはにかくるとみつる月なれど―「月」が「山の端」に「隠る」とするのは定形。

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなん

(古今集・雑上・八八四・業平)

おしなべて峰も平らになりなむ山の端なくは月も隠れじ

(後撰集・雑三・二二四九・上野岑雄)

山の端に隠れなはてそ秋の月この世をだにも闇に惑はじ

(後拾遺集・雑一・八六七・範永)

○わがこゝろにぞふかくいりぬる―「山の端に隠る」に対して、「山」と「心」、「端」と「深く」、「隠る」と「入る」で細かに対照されている。月が心に入るとするのは月輪観によるか。

深く入りて住まばやと思ふ山の端をいかなる月の出づるなるらん

(詞花集・雑上・三〇九・高松上)

山の端は名のみなりけり見る人の心にぞ入る冬の夜の月

(後拾遺集・冬・三九一・大式三位)

月影を心に入ると知らぬ身は濁れる水に映るとぞ見る

(頼宗集・一〇八)

見る人も心に月は入りぬれど出でと出でにし空は曇らず

(和泉式部集・一二三)

【評】 道命には珍しく仏教的な和歌と見られるが、内容は広く一般的ななもの。上句下句の対照に工夫がある。

正月、人のなくなりたるところにて

318 きみがありしはるのうちとぞ思いづるたのみさへこそいまはたえぬれ

【校異】 ○正月―正月に(谷)、○たる―たまへる(谷)、○きみか―きかず(谷)、○思いづる―おもいつる(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 正月、人が亡くなった所で

あなたが存命だった春のうちだと思ひ出しました。(再会への)期待までも今はなくなりました。

【語釈】

○正月、人のなくなりたるところにて一前の年に、その家の人が亡く  
なって正月を迎えた所か。

先帝おはしまさで、又の年の正月一日おくり侍りける  
いたづらに今日や暮れなんあたらしき春の始めは昔ながらに

(後撰集・哀傷・一三九六・定方)

○きみがありしはるのうちとぞ思いつる―去年の正月は、まだ君が生  
きていた春のうちだったのだと思いつ出した、といったこと。

月日のはかなう過ぐるを思ふに

すくすくと過ぐる月日の惜しきかな君があり経しかたぞと思ふに

(和泉式部統集・七一)

○たのみさへこそいまはたえぬれ―「頼み」が何に對する期待かはっ  
きりしない。一応、会えるという期待すら今は絶えたと考える。新  
年を迎えて、改めて君の死を確認した。

来ることは常ならずとも玉鬘たのみは絶えじと思ふ心あり

(後撰集・恋六・一〇〇一・読み人知らず)

【評】 具体的なことが不明だが、正月になって、かつて同じ時期に存  
命だった人物を思い出して、その人物がいれば可能だったが、亡くなっ  
たために不可能になったことに気付いて詠んだということか。

おはなといふ女の、いみじげになりてわたるをみて、四月十

日

319 夏草はかるばかりにもまだならでおはなはいたくおいにけるかな

【校異】 ○夏草は―夏草の(書<sub>2</sub>)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 おはなという女が、ひどくやつれて渡って行くのを見て、

四月十日

夏草は刈り取るほどにもまだ育たないでいて、秋の尾花の白い穂が多  
く伸びるように、おはながひどく年老いたことだよ。

【語釈】

○いみじげになりて―「いみじげ」は程度が甚だしいこと。ここでは、  
年老いてひどくみすばらしい姿。

あはれがりなどする夕つ方、いみじげに腫れ、あさましげなる犬  
のわびしげなる (枕草子・上にさぶらふ御猫は)

去年も心みむとて、いみじげにて詣でたりしに、石山の仏心をま  
づ見果てて…… (蜻蛉日記・中卷)

○四月十日―夏のはじめを表す。

○夏草はかるばかり―夏草は茂ると、牛馬の飼料や肥料として刈られ  
る。

このごろの恋のしげくて夏草のかりぞ来れどもおひ敷くがごと  
繁さのみ日ごとにまさる夏草のかりそめにだに問ふ人のなき  
(古今六帖・第六・夏草・三五五二)

○おはなはいたくおいにけるかな―「おはな」は女の名に尾花を懸け  
る。上句の夏草の様子と対照させて、秋草の尾花(薄)の穂が出た  
様に「おはな」の老いた姿を重ねた。

行末のしるしばかりにのこるべき松さへいたくおいにけるかな  
(拾遺集・雑上・四六一・道濟)

【評】 時節との矛盾をも重ねつつ、女の名前に寄せて尾花のイメージ  
で老女の風姿を描き、巧みに一首を作り上げた。

おはなといふ女の、いみじげになりてわたるをみて、四月十

日

320 夏草はかるばかりにもまだ育たないでいて、秋の尾花の白い穂が多  
く伸びるように、おはながひどく年老いたことだよ。

【校異】 ○夏草は―夏草の(書<sub>2</sub>)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 おはなという女が、ひどくやつれて渡って行くのを見て、

四月十日

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 人がこのように言った

円座を組んで待っている甲斐があるのならば、時鳥の到来はあなたの修めた仏法の効験と思ひましよう。

【語釈】

○まどゐして―円をなして座り、団欒の時を過ごす。

今日のごとわが思ふ人とまどゐしていくよの春をともに待ちいでん  
(宇津保物語・葦開下・七八六・正頼)

○まつかひゝほとゝぎす―時鳥は、夏の夜に飛来して鳴くのを、人々が待つものとされる。

よもすがら待つ甲斐ありて時鳥あやめの草に今も鳴かなん

(応和二年内裏歌合・一・博雅)

夏の夜の夜は更けぬるを時鳥待つ甲斐ありて今は鳴かなん

(道濟集・一〇三)

○みのり―「御法」。仏法を尊んで言う語。ここでは道命の読経や説法を言い、一首はその素晴らしさで時鳥が鳴くとする。

嬉しくも君が御法にまひ会ひて見えし爪木も樵らむとぞ思ふ

(出羽弁集・一二二)

契りおく君が御法に引かれてぞ思ひ捨つべきこの世にも経る

(拾玉集・五六一〇)

○ほとゝぎすゝしるしとおもはん―「しるし」は効果。期待する時鳥の声を聞けるのは、多くの和歌で何らかの行いの効果とされる。

神まつるしるしありても郭公けふ初声を待ちでたるかな

(恵慶集・七)

今夜さは音にあらはれね時鳥かたらふ事のしるしと思はん

(散木奇歌集・二五七)

過ぎがてに遠返り鳴く時鳥待つ夜の積もるしるしと思はん  
(忠通集・三三二)

【評】 人々が渴望する時鳥の鳴き声を、道命の仏法修養の成果とする。

本来美的趣味である風雅と、生真面目に追求すべき宗教上の修養を重ねることには、重厚な論理や深い真理が裏にあると言うより、ここでは軽い諧謔があるとみるべきだろう。道命と同類の和歌の諧謔性への思いを持つ人物の詠だろう。

返に

321 ほとゝぎすまたざらませばわがのりにたれかこゝろをかくべかりける

【校異】 ○返に―返(谷)、○わかのみ―我物(書?)、○かくへかり―かへへかり(書?)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事に

時鳥を、その声に期待して待つのでなかったならば、私の説く仏法に誰が心を掛けるだろうか。

【語釈】

○またざらませば―「待たざらば」に同じ。時鳥の声を待つて聞くことは一般的なことだが、待たないことを想定した。

殿上人の時鳥待つとてありけるに、暁になるまで鳴かざりければ

待たずこそあるべかりけれ時鳥寝に寝られでも明かしつるかな  
(実方集・一二三)

○のりにこゝろをかく―「仏法に心を掛く」で、仏法の世界観を信じて心を委ねる。

憂き身をし渡すときけばあまを船のりに心をかけぬ日ぞなき  
(金葉集・雑下・六三九・懷尋法師)

【評】 先方の道命への褒め言葉を軽々しいものとして、皆の本心は時

鳥の声目当てで、その為にこそ誰もが私の読経や説法を聞くのだろう、と切り返した。

322 たゞひとこゑにあけぬめるかな  
とあれば

あかつきにほとゝぎすをきゝて  
またもまたきかまほしきを時鳥

【校異】 ○めるかな―なるかな(谷)、○まほしきを―まくましきそ  
(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 暁に時鳥の鳴き声を聞いて  
ほんの一声で夜が明けてしまったようだよ  
とあったので

また幾度も聞きたいのだが、時鳥を

【語釈】

○たゞひとこゑにあけぬめる―夏の夜は短くて、夜更けて鳴く時鳥の  
一声で夜が明けるとされる。「あかつき」は夜明け直前。

夏の夜の伏すかとすれば時鳥鳴く一声に明くるしののめ

(古今集・夏・一五六・貫之)  
時鳥一声に明くる夏の夜の暁がたやあふこなるらん  
(後撰集・夏・一九一・読み人知らず)

○またもまたきかまほしきを時鳥―時鳥の一声にも足りず、またの  
声を期待して果たせないとする事は、典型的な時鳥の詠み方。

け近くて聞かまほしきを時鳥まづ初声はいづくにか鳴く

(恵慶集・二六二)  
珍しき声ならなくに郭公ここの年の年をあかずもあるかな  
(古今集・夏・三五九・読み人知らず)

うたたねの夢にやあるらん郭公またとも聞かで過ぎぬなるかな

(栄華物語・根合・五二四・頸房)

時鳥またもや鳴くと待たれつつ聞く夜もこそ寝られざりけれ

(千載集・夏・一五三・頼輔母)

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かんかも

(新古今集・夏・一九三・読み人知らず)

【評】 連歌としては、「ひとこゑ」と「またもまた」を対立させているのが表現上での工夫だろうが、内容的には極めて平易。むしろこれを家集最終歌としたことに意義があるのかもしれない。つまり、この道命集中で時鳥を歌った和歌の多さは注目に値することで、それは家集編纂の立場からも意識されていたと想定できるのである。

(完)